

心の糧の豊かさを求めて
会長 畑田 勇

期待された 21 世紀は、まさに内憂外患、波乱に満ちた時代になりそうな気配が致します。人間愛に満ち溢れた好ましい時代の到来はないのでしょうか？

夏目漱石の「我輩は猫である」は面白い。清少納言の「春は曙」は楽しい。寺田寅彦の随筆は考えさせられる。夫々の時代の背景の中での人々の生き様を偲ばせたり、興味を持たせたりします。

有名な古典「平家物語」は、人の世の哀れを余す所なく、今に伝えてくれます。琵琶の音に合せて聞く平家一門の盛衰は、語るも涙、聞くも涙の人生訓と申せましょうか。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕す。奢れる者も久しからず、ただ春の夜の夢の如し。猛き心も終には亡びぬ。偏に風の前の塵に同じ。」

言い得て妙とはまことにこのことでありましょう。私共の心に強く訴え、揺さぶり、そして深い感銘と感動を与えるのであります。

先人の残された数々の訓えは、私達に暖かい警告を与え、また、行方を照らす道暗灯となってくれる事でありましょう。私共の活用保存会の活動も日本の将来の指針を示す一つとなればと願っております。

新正会員（平成 15 年 3 月以降）

青山明治	明石 満	稲富明子	井上靖彦	井原雅恵
江口太郎	緒方淳子	澤瀉美代子	笠井俊夫	澤木政光
中野 環	新田友茂	新田百合子	畑田元義	浜田健一
原 道寛	古澤照明	古澤容子	Otto Vogl	Jane Vogl
増原 宏	南 努	森下由紀子		

新特別会員

柏木隆雄	肥塚 隆	澤木政光	辻本良信	畑田弘美
------	------	------	------	------

平成 15 年 事業報告

1. 第 4 回 畑田塾 2003 年 3 月 29, 30 日
「本を読む楽しさ」
－日本とヨーロッパの眼で
大阪大学文学部教授 柏木隆雄
「超高速ビデオカメラで見る一万分の一秒の世界」
大阪大学基礎工学部教授 辻本良信
大阪府立大学工学部助教授 砂田 茂
「人はなぜ食べて眠らねばならないのか」
澤木内科医院長 澤木政光
「歌、オルガン、ハンドベルで楽しく遊ぶ」
関西二期会会員 畑田弘美
2. 一般公開とフォーラム
 - 1) 第 7 回春の一般公開と健康フォーラム
5 月 25 日
「体を守る免疫の仕組み」
花粉症からリュウマチ、悪性腫瘍まで
大阪大学医学部教授 吉崎和幸
 - 2) 第 8 回秋の一般公開と美術フォーラム
11 月 16 日
「大河を描く一風景画の軌跡」
宝塚造形芸術大学教授
新制作協会会員 中村貞夫
3. 出版
 - 1) 「アフガニスタンの美術—文明の十字路の古代と現代」
大阪大学総合学術博物館長 肥塚隆

「建造物の活用とまちづくり」

LIC はびきの館長 笠井敏光

1. はじめに

建造物や美術工芸品などの文化財は、文化財保護法による制約を受け、国民にその保護が求められてきた。法律の第1条では、「文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする」とある。つまり文化財の保護には、保存と活用の両面があることを示している。

しかし、これまでの保護は、保存を中心として将来に残すことを意識しすぎた方策であり、その活用もニーズにあわない表面的なものや単なる消費にすぎなかった。文化財は人々の文化行為の結果、生まれたものであるという原点に立ち返り、今、生きている人がいかに利用し、行動し、学びとるか、そして新しい文化を付加することによって再生させ、どのようにして人々に還元するかを議論する時機にきている。

これからは、文化財だけでなく環境や自然、風土など地域の文化遺産を素材に、その価値を見出す作業をおこない、新しい文化を醸成し、その成果を市民に戻すことこそ必要で、市民主体のこの活動が文化づくりであり、まちづくりといえるのではないだろうか。

そこで、重要文化財民家や重要伝統的建造物群保存地区、登録有形文化財など建造物の活用とまちづくりについて考えてみたい。

2. 重要文化財民家における活用

「全国重文民家の集い」が創立25周年を記念して平成13年に行った公開シンポジウム「21世紀の古民家を考えるーその保存の意義と活用についてー」で議論された内容をもとに編集された『重文民家と生きる』と聞き取り調査から検討する。

国宝保存法によって昭和12年に大阪府の吉村家住宅が指定されたのを第1号として、平成13年時点では重要文化財の民家は332件、688棟で、このうち126件が公共団体の所有で、個人所有の民家の割合は約6割である。

平成8年に「民家の集い」がおこなったアンケートでは、併用を含めて約7割以上が指定家屋に居住し、なんらかの公開をおこなっている民家も約7割を数える。しかし積極的な建物や屋敷の活用となると約2割にすぎない。

活用にあたっての課題としては、復原された家屋は日常生活を切り捨て、現代の生活様式から遊離したものとなり、空き家の状態で研究・鑑賞目的の展示物的存在となることである。家は本来、人が住むためにつくられたものであるから、建物の保存と活用とともに、その中で住み続けられる仕組みが大切である。

ハードである建物とソフトである生活、そしてヒューマンである人間の三者は不可分のもので、住むことによって変化させてきた民家はその可変性に価値がある。

これまでのように建物の外観を見せるだけの文化財ではなく、現在の人々が利用し、地域の人たちの集

いや交流の場、新しい文化の創造につながる活用が望まれる。文化活動を行い、文化を発信する文化財でありたい。すでに役割や機能を減少もしくは滅失させたものであっても、再び息を吹き込み、再生させて人々に還元するシステムづくりが求められる。

3. 重要伝統的建造物群保存地区における活用

昭和40年代から顕著となった高度成長による社会的変化によって、歴史的な集落やまちなみが急速に失われていく状況に対して、住民などによる保存運動がおり、地域独自に保存事業が始められた。これに対応して昭和50年の文化財保護法改正によって「伝統的建造物群保存地区」制度が創設された。最も早く国の選定を受けた地区のひとつである長野県南木曾町妻籠宿を対象に聞き取り調査をおこなった。

来訪者からは、まちなみのすばらしさに対して店舗や宿の評価が落ちること、短時間の外観のみの見学であること、建物だけでなく人とのふれあいを望んでいること、観光地化を望んでいないことなどが指摘された。

関係者からは、憲章や規制の見直し、世代交代と後継者問題、利益の再分配など多くの課題が抽出された。全体を通しての課題としては、団体客から個人・グループへの移行、オリジナル商品の開発と新たな空間の演出、地域の歴史や伝統を継承した文化の提供、体験型のふれあい事業の実施、人の存在と生活が資源であり価値があること、観光地をめざさない魅力づくり、場と中身を備えた本物の価値、長期の計画より目の前の実践などがあげられる。

4. 登録有形文化財における活用

近代を中心とする多くの文化財が近年、消滅の危機にさらされている。これまでの指定制度だけでは不十分であることから、それを補完するものとして平成8年に文化財保護法の改正がおこなわれ、穏やかな保護措置をとる文化財登録制度が発足した。対象は建築物のほか土木構造物などを含む建造物で、原則として50年を経過し、歴史的景観や造形の規範などになっているものである。大阪府羽曳野市にあり、平成11年に登録された畑田家住宅は、江戸時代の庄屋屋敷の格式を残し、明治20年代に再建されたものである。当主の積極的な考え方により、この建物の価値を保持しつつ、新しい文化を生み出し続ける活用をめざし、畑田塾と一般公開、フォーラムなどが継続的に実施されている。

畑田塾は、江戸時代からの歴史・文化を語りかける屋敷において、将来のことを考え始める子供たちに色々な分野の専門家との対話と学習を通して、自分さがしをしてもらうのが目的である。また、フォーラムは多くの方々や国際理解や環境問題、音楽や美術などについて語り合うやすらぎの空間を提供している。

建物は、古いから価値が増すのではなく、本来の機能は減少し続けている。使いながら保つ動態保存と文化をインキュベートする器としての役割を重視したい。

畑田家の納屋からの発信

中村貞夫

晩秋、恒例の畑田家住宅一般公開とフォーラムが開かれ、小生が「大河を描く一風景画の軌跡一」のタイトルで話をさせていただいた。自分のささやかな道筋を語るのはいささか面はゆいところもあったが、大勢の方々が熱心に聞いて下さったのは有難かった。

晴天に恵まれ、庭の納屋（アトリエ）の前に油彩画の大作「ナイル・アスワン1」（167×472cm）を展示した。庭の景観とよく似合っていると言って下さった方があり、自分もそう感じて嬉しかった。

30年以上も前に大阪市内から畑田家住宅へ引越して来た当初は南側の米蔵で絵を描いていた。その後、当主の畑田耕一氏の許可を得て、納屋をアトリエにすることになり、建築家の石井智子さんに内装していただいた。畑田家住宅が登録有形文化財に指定されるきっかけを作ったのも石井さんである。こんな豊かな空間で仕事をさせていただけるのは画家冥利につきるが、これも畑田家の皆様のご理解のお陰と日々感謝しながら過ごしている。

この屋敷は文化財として優れた点が多いが、特に好きな場所はアトリエから見た庭の景観、庭側から見た長屋門、それに主屋の八畳の間である。この部屋は何とも居心地が良い。古いアルバムを開くと応接間でピアノを弾いておられる小磯良平先生の写真がある。伊藤継郎先生や新制作の方々と訪ねて下さった折のものである。丹比小学校や郡戸の集落を散歩された。

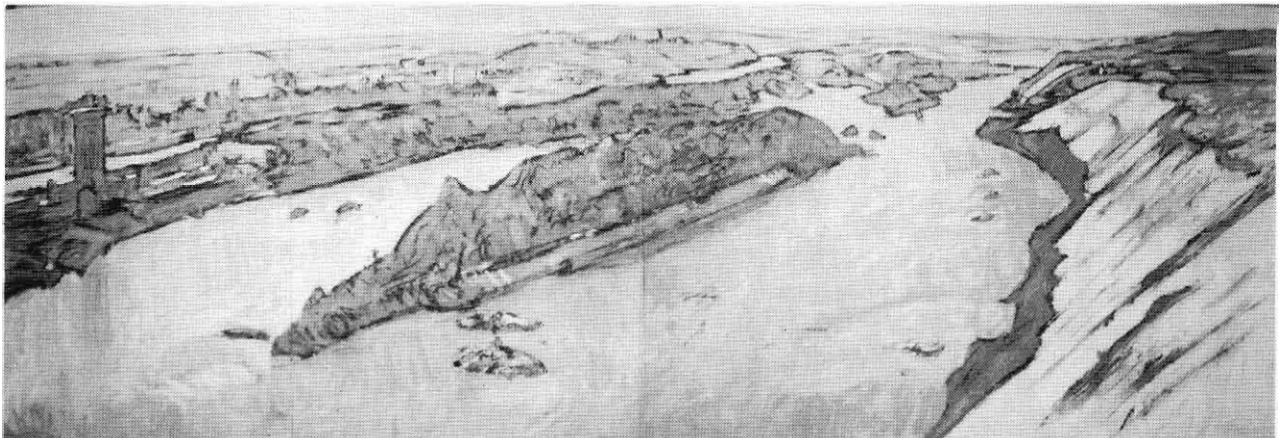
種子島・屋久島、四万十川・土佐海岸、富士

の四季、それに四代文明シリーズの〈ナイル〉、〈インダス〉等、風景画の大半が畑田家住宅から生み出された。その発想、制作はこの建物の中にゆるやかに流れる時間と豊かな空間に包まれて得られたものだと思う。

文化財の登録と合わせて活用保存会が立ち上がり、羽曳野市のご協力と多くの方々のご支援のお陰で、地味だが継続的な活動が続いている。末永く持続するようその一翼を担いたいと思っている。



富士〈秋〉2 210×354 cm 1989



ナイル・アスワンI（エジプト）167×472 cm 1998

第4回畑田塾（2003年3月29, 30日）

普段本を読むとき、作者のことは考えますが、その文学を伝える人のことはあまり考えたことはありませんでした。良い文学作品は、建築で例えると文化財みたいなもので、残そうとしないと年月が経つにつれ消えてしまうのでしょうか。また話の中で気にとまったのは、文化の違いを超えて人々に共通する感情があるということでした。違う国の作品でもこんなにも共通する部分があるとは思いませんでした。最近あまり本を読む機会がなかったのですが、柏木先生の話聞いて本を読む楽しさを再発見し、また本を読んでみようかなという気になりました。

最先端という何でも高速という印象があるのですが、高速ビデオカメラの話で実際に撮影し映像を見るまでは、カメラの設定や撮影角度の調整、撮影対象の準備や撮り直しなど沢山の作業が必要なのは知りませんでした。最先端技術でもすぐ結果が出るというわけではなく、結果を得るまでの研究の大変さが分かりました。睡眠や食事がなぜ必要かという話では、模型を使った脳の構造の説明が興味深く、普段なかなか触れる機会のない医学の分野の勉強をさせて頂きました。

「荒城の月」や「ふるさと」などは音楽の授業で度々歌ったことがありますが、有名な曲なのだという程度の認識しかありませんでした。実際、畑田弘美先生が歌ってくださったのを聞くと、その曲の良さが分かり感動しました。歌ったことがあっても曲の本当の価値は理解してなかったのだと思います。ミュージックベルを演奏したのは初めてでしたが、思っていたよりは演奏するのが難しかったです。でもすごく良い音だったし、なかなか演奏することは出来ないで良い経験になりました。

久米由香里（筑波大学1年）

今回の畑田塾は、今の僕にとって、とても難しい話ばかりでしたが、いつか解る時がくるまで、話を覚えておこうと思います。畑田塾に行くたびに「こんな人もいるんだ。」とか「こんな世界もあるんだ。」と思って、考え方が広がっています。

久米治樹（瀧川中学校3年）

心に残っていることは、ミュージックベルを鳴らしたことです。学校の学芸会で5年生が使っていたのを思い出しました。5年生は簡単に振り大きな音を出していましたが、実際には、音はなかなか出ませんでした。野球で、スナップの練習をすれば大きい音になるらしいです。

中川昂（大阪教育大学教育学部付属天王寺小学校4年）

1日目は、詩のことやいろいろ知らなかったことがわかってうれしかった。次に、飛行機のことや、高速カメラでとった写真を見せてもらって、とてもびっくりした。2日目は、頭の「のう」のこと、「すいみん」のこと、「ゆめ」のことがわかってよかった。ちょっとむずかしかった。2日間で、とてももの知りになった気分だった。畑田真莉子（丹比小学校3年）

私は2日目しかきていないけれど、とても楽しかったです。「人はなぜ食べかておむるのか」は、はじめて聞いたことが多かったし、「ハンドベル」ではテレビで見ていると簡単そうに見えただけで、音が鳴りにくくむずかしかったです。合唱団に入っていて、いろいろな曲を聞いたりするけど、オペラの曲を目の前で聞いたのははじめてです。貴重な体験でした。

染川幸織（高鷲南小学校6年）

楽しかったし、いろいろなことがよくわかりました。高速カメラで写す実験がおもしろかった。難しくよくわからない話もあったけれどおもしろかったです。

深瀬清宏（豊中市蛍池小学校4年）

蝶々夫人のアリアの歌がすごく共鳴していてよかった。脳の目方は約1.3kgなのに、からだ全体の使うエネルギーの20%を消費していることにびっくりした。シャボン玉のはれつやテレビを高速カメラで写したのを見るのはおもしろかった。

小西雄也（白鳥小学校5年）

難しい話もありましたが、いろんなことがわかってよかった。歌はすごく響いて良かった。のう（頭の中）の話にでてきたパズルは難しかったです。小さなヘリコプターが飛んだのがすごかった。畑田家は古かったけど、いろんな昔の物が見学できてよかったです。2階への長い階段、こわいけど、いつかのぼってみたいなあ。

石田 萌（丹比小学校3年）

1日目は、話が難し過ぎてチンプンカンプンでした。2日目は午後の分は少しわかったけど、午前の方はやっぱりチンプンカンプンでした。1日目と2日目の授業をたして4とすると、3/4はチンプンカンプンでした。でも、2階へのはしごを登りきれるようになったことなど良いこともあって、良かったです。来年もくぞ。

稲富桃子（高向小学校5年）

柏木先生のお話では、内容も大切だけれどもそれを伝えるときの言葉の響き、リズム、形式などの表現のし方で、伝わり方もわかり、それによって後々まで残っていくことになるということがわかりました。地図が、その国を中心に書かれていることも、面白いと思いました。超高速ビデオでシャボン玉は針でついたところから、破裂がひろがる様子がとてもよく分かりました。脳のことで、一番びっくりしたのは脳がかなりのエネルギーを消費することです。一番印象に残ったのは、アリアを聴かせていただいたことで、とても気持ちのいい時間を共有させて頂き、音楽のすばらしさを身体で感じる事ができました。

稲富明子（稲富桃子さんのお母様）

脳の話は少しむずかしかった。頭の模型を見て、組み立てるのがたいへんでした。畑田家の庭には、いろいろな花があつてきれいでした。2階には、何もなくて広く、こわかったです。弘美さんの歌声がきれいでした。ベルをならせてもらってうれしかったです。

近岡史織（東大阪市立繩手小学校3年）

1日目、娘一人で参加。2日目、娘二人と私と参加。東大阪からの参加でしたが、他市にも開かれていて感謝いたします。眠りの話しは難しい言葉もありましたが良くわかりました。難しいことをわかり易く伝えようとして下さって有難うございます。畑田弘美さんのソプラノとってもびっくりしました。本物の、機械を通さない声の響きがこの家をツーンと通り抜けていった気がしました。ミュージックベルも子供が楽しみにしていて体験させていただき有難うございました。子供達は長い階段を通過して2階にも登り、汲み取り式のトイレ、庭と昔の家を十分味わいました。本物を子供に与える機会を有難うございました。足踏み式のリードオルガンはとてもなつかしく聞かせていただきました。近岡ひとみ（東大阪市近岡史織さんのお母様）

今年は、昨年よりも内容が難しかったです。特にお医者さんの専門的な話になると全然ついて行けなかった。1日目のヘリコプターの模型は、すごく上手に出来ていて、「こんな物が作れるんだ」と率直に感心しました。岡本徳高（峰塚中学校3年）

塾での学びの時間は、とてもあたたかく、自由でこころよい学びの場でした。子供といえども、一人一人を大切な人間として尊重し、学べる場というのが、今の教育の世界にどれだけあるのでしょうか。畑田塾では、横には世界の中での一人という立場で、相手の立場をわかってつきあえる人間として、縦には歴史を伝え未来へ向う人間として、「ひとり」を大切にしていると思います。「学ぶ」とは良い人間になるためだという柏木先生のお話はまったく一言で人生の本質を言って下さったようです。

豊かな学びの場を創って頂いたことに感謝します。

岡本裕子 (岡本穂高君のお母様)

子供文庫の三年生を終えたばかりの子供 4 人を連れてきた。話を聞いてくれるかと心配したが、先生の話に一心に耳を傾けて聞いていた子供達に感動した。明日も来ていいかと尋ねた子の目はキラキラと輝いていた。常々思っていた「子供は質の高い物に憧れ、求めている」ことが実証された。また、畑田家当主の先生や話をしていただいた先生方の思いがひしと感じられた。文庫の子供達に一所懸命勉強して、あの大学に入りなさい、最高の先生方のお話を聞けるよと、言える自信を持たせた充実した二日間でした。今後の事、とても楽しみにしております。

石田美津恵 (子供文庫)

2日間文学、科学、医学、芸術と格調の高い講義、実験などを見せて頂きました。幅広い年齢層の参加者に講師の先生も大変ご苦労されたことでしょうか。子供達が静かに聞いており、中味が濃いと理解しにくい部分があってもしっかり聞くものだと思います。本物のオペラ歌手の畑田弘美さんの歌声にうっとりいたしました。以前、関西二期会の方の独りオペラを聴いたことがあります。これからは畑田さんの出演をねらって行きたいです。塾長の畑田先生の暖かい人柄、学問に対する姿勢、ひた向きの思いが伺えた2日間でした。また参加したいと思えます。

浅田宏子 (大阪府教育センター非常勤嘱託)

いろいろな分野の専門家からお話が聞けてとても楽しく過ごしました。自分自身、文学研究に近いことを勉強していることもあり、文学者の文学観を聞いて勉強になりました。高速カメラの技術に感動しました。また、脳の構造とその働きについて知らないことが多かったため、もっとよく知りたいと思うようになりました。オペラのお話はとても印象に残りました。イギリスに留学中よくオペラを観に行きましたが、これほど近い距離でアリアを聴くのは初めてでした。空気がびりびり震えているのを感じ、涙が出そうになりました。ありがとうございます。齊藤園子 (大阪大学言語文化研究科博士課程)

話題が幅広く、聞いていて自分に種々な知識が入って来のが分かる話で、あっと思う間に時間が過ぎました。子供達が「ちんぷんかんぷん」と言いながらも、静かに話に引き付けられたのも、話し手の熱意が言葉に表れていたからだと思いました。柏木先生は、日本と西洋の視点からの「命の短さ、大切さ」を説明下さいました。最近の作家のことも例に挙げて話していただけたらもっと親しみを感じたのではと思いました。「本を読む楽しさ」は、本を読む大切さ、楽しさの中に人生を豊かにする意味が殆どですから、大人特に市民大学的な場でもご講演下されば、「本ばなれ」、「マンガ本読み」が少しでも減少するのではないかと思います。先生のお話の途中で、ロンサールの詩、あるいは李賀の詩の一部分でも、皆で声を出して読んだら素晴らしいかと思う。本当に心豊かになり、今後本の読み方の考えも変えられる、幅広くなったような講演で有難うございました。大学で、先生の意思を汲み取って、人の心を打つ文学を広く長く伝えて下さる人達を多く養成して下さいますことを祈っております。

浜中佐和子 (吹田市)

小・中・高校生が進路を選ぶことの参考になるようにと企画されたというお話でしたが、先生方のお話を伺っているとかなり歳をとっている私も、これまでに経験しながら忘れてしまっていたことを思い出し、若い時にこのようなお話を伺っていたら、もっと良かったであろうと思うことが数多くあり、大変有益でした。このような近くでソプラノを聞かせて頂いたのは初めてで、息を深く吸って肺を膨らませると、歌声が私の肺に共振するようでとても感動しました。足踏みオルガンの音色はな

つかしく、小学生の頃を思い出しました。オルガンの伴奏と唱歌が、畳や高い天井で吸収されたり反響したりして、リノリウムの床では聞けないような調和を生じていました。畑田家では昔の住宅がよく保存されていてここに暮らしてこれた人々の息吹が伝わってくるようです。日本の伝統が次世代に伝わるこの企画がこれからも継続し、成功することを祈念します。

畑田元義 (寝屋川市)

春期一般公開と健康フォーラム (2003年5月25日)

私は只今、殆ど毎日化学の研究室で生活しています。そんな中、畑田先生に声をかけていただき、一般公開とシンポジウムに参加いたしました。畑田家に入った時、材木が太く、節のない見事な木で作られていることに感心させられました。現代ではこのような家を建てようとしても、まず材料の入手が困難で、世間から環境破壊だと言われかねません。しかし、一見、贅沢な構造に見えるのですが、昔の職人さんたちは良くした物で、歪曲した木を上手に組み、その木の特性を生かして、家を構築し、その木材もリサイクルできるなどの見方をすると、現代の揃った材木を決まったマニュアルで加工する方法とは大きく違っていると感じました。そろそろ古いものを見て、新しい時代を考えることが必要であると改めて感じさせられました。

私は研究所でレーザー化学の研究に携わっているため、医療には殆ど認識がありませんでしたが、シンポジウムでの免疫のお話は分かりやすく、レーザー化学と融合したらどうなるだろうという構想を描きながら、拝聴させていただきました。また、今回は一般の方々と一緒に拝聴して、質問者の態度に「ハッ」とさせられました。質問には、実体験に基づいて単刀直入に迫るものが感じられ、本当に知りたいという心からの声を反映していると感じました。研究と教育に携わる身で、そのような積極的な探究の姿勢を学校という環境の中で忘れかけていた気がしました。研究室という狭い空間で毎日生活している自分にとって、非常によい刺激になりました。

原 道寛 (大阪大学産業科学研究所)

今回始めて畑田家住宅を訪ねましたが、幼いころ住んでいた家を思い出しても懐かしくあたたかい気持ちになりました。このような柔らかな気持ちは畑田家を訪れる多くの人達が感じておられることだと思います。そうした空気の中で聞くお話は身構えることなく自然なスタイルで聞くことができ、素直に興味を持つことができました。吉崎教授のお話を聞かせていただいて、自分が今こうして健康な状態でいられることがとても幸せなことだと気づきました。そして、これからも健康を維持していくために私自身ももっと自分の体について知るべきだということ学びました。ただ、スライドの展開が速くて、さらっと流した感じになってしまったのが残念でした。

古いものを良い状態で残していくことはいろいろな苦労があるでしょうが、これから畑田家を訪れる人々の為にもできる限り今のかたちの家を保ち続けていっていただきたいと思えます。

林 亜沙美 (福井工業大学4年)

畑田家へはかつて、中村先生の絵の教室に在籍していた時に寄せていただき、明治20年頃再建された大きな屋敷構えと其の一隅に設けられたアトリエを拝見しました。今回フォーラムに参加して、江戸時代から地域の中心として重要な役割を果たして来た畑田家の歴史にあらためて触れる思いが致しました。

昨今の物(力)の先行と心の退行ないし喪失との間の暗い深淵を見るような事件の連続は目を覆いたくなるものがあります。この様な時、建物が国の文化財に登録されたのを機に、畑田塾の開設、講演会やフォーラムの開催など心の復活にも通ずる文化活動を始められた事の意義は誠に大きいと思われま

吉崎教授による健康フォーラムでは、一般には容易に理解し難い「免疫（異常）」について解りやすく解説頂きまして、エイズ、アトピー、癌、リュウマチ等の難病の発症と最近の治療についての得難い知識に触れることができ感謝しております。これらの病気は現代病の根底にあるストレスとも関係が深く、時宜を得た貴重なお話であったと思います。ただ、先端医学に基づく医療も、患者の思いからは必ずしもすべて当然のものとして受け止められていない所があります。自然治癒力に目を向けた東洋医学の治療法についても、その功罪を含めて触れて頂ければ有難かったと思います。

安達幸雄、昭子（岡山市）

18年前、夫の赴任にしたがって1年間暮らしたアメリカ中西部で、枯草熱に罹ったのか、1年間くしゃみと付き合った。北摂に住み着いてからも、4月末ごろから梅雨明けまで、イネ科植物によるアレルギー性鼻炎に悩まされ、花粉症の罹患歴16年を記録する。新緑の芳しい5月に、戸外で深呼吸してその芳香を楽しむなんてことはご法度だ。なんだか1年の4分の1を損している気分は否めないが、わずかに数ヶ月我慢すればよい季節限定の病気なので、長年連れ添った夫の如く、なんとはなしのお付き合いを続けている。吉崎先生のお話を聞いて、Th1細胞とTh2細胞のバランスが崩れることが発症の引き金となっているのだと、おぼろげながら納得した。

不治の病と言われたリュウマチも、IL-6レセプター抗体治療によって、寝たきりから車椅子生活を送れるまでに症状快復できるとのことであった。本来は病によって失われていく筈の日常生活の活力が、この治療によって取り戻せるなんて、画期的なことだと思う。新薬は2006年には市場化される見通しとのこと、病気の原因究明と治療方法の研究の急速な進展を実感した。吉崎先生をはじめ共同研究者の方々のご努力の賜物である。

4月半ば、私の祖母が93歳で亡くなった。進行性の脳腫瘍と診断され、年齢的にも打つ手なしといわれ、亡くなる2ヶ月前に家に引き取って在宅サービスの手を借りながら両親と3人で看取った。枕経をあげてくださった僧師のお話によると、人は満潮の時に生まれ、引き潮の時に亡くなるとのこと、祖母はそのお話の通りに、両親と私の眼前で逝った。医療技術が進歩して寿命が伸び、祖母も30年前から手術を何回か経験しているにもかかわらず、90年を超える生を全うした。反面、皆が皆、満潮の時に生まれ、引き潮の時刻に亡くなるというわけには行かなくなった。

医学のたゆまぬ進歩に圧倒されて、吉崎先生のお話を拝聴していた私の耳に、雷音の音が届いた。ふと我に返って、辺りを見回してみた。神棚が祭られ、その神棚は高い天井とうまく間合いをとるためか、踏み台を使わないとお供物が捧げられない高さに据えられている。神とは本来人間よりは高い立場あるいは異なる視点からものを見ている筈である。科学の進歩が、この神と人間との関係を変えてしまうのではないかという虞を、ふと思った一日であった。畑田家住宅の柱、壁、畳は、この家で生まれ、この家で亡くなられたであろうご先祖の魂の息吹を吸収し、時代を超えて泰然と存在している。そんな歴史のある静かな邸宅で、生病老死の病から生ずる人間の苦痛を除去しようという最新の免疫療法のお話に耳を傾ける機会を得て、祖母の入院と看護を通じて、いささか医療機関にがっかりさせられていた私も、少し心が癒された気がした。北山美紀（箕面市）

秋の一般公開と美術フォーラム（2003年11月16日）

一般公開の日、懐かしい暖かさを醸し出す畑田家住宅は、穏やかな日差しの中で輝いていました。そして、納屋（アトリエ）の前には、中村貞夫先生の作品「ナイル・アスワン I」が公開

されており、それはエジプトの風とともに遙かなる時空へ旅する錯覚を起こさせるほど、雄大なナイルの自然そのものでした。

古き良き伝統と、神様に真の自然と対話することを許された中村先生のお心とが一体となり、今まで呼吸したことのない空気となって、私の心の奥深くまで沁み込んでいきました。

畑田家で過ごした安らかな時間は、今を生きる者へ発信される多くのメッセージを、少しでも聞き取れる澄んだ心になるように、私たちにビタミンをくれたようです。

向山裕子（宝塚造形芸術大学サテライト大学院生）

畑田家住宅をはじめ訪れて、白壁の家の洗練された外観と、家の中に入ったときの暖かい雰囲気とのギャップに驚き、また大きくてきれいなお庭があって、この家で中村先生の作品が描かれていることを率直に受け入れられる気がしました。

私は先生の油彩の作品を直に拝見するのは初めてでした。その大きさは知っていましたが、絵の奥行きに驚き、また作品を斜めから見ると真正面から見た時とは違ったリアリティが現われるように感じました。その後聞いた中村先生の講演で、先生ご自身が「私の絵は、よく人から真正面から見たときより少し斜めから見た方が良くと言われることがあります」と仰っていて、やっぱり私だけじゃないんだと思いました。どうしてかは分かりませんが・・・まるで景色そのもののような絵でした。

松村依子（宝塚造形芸術大学サテライト大学院生）

充実した一刻を過ごさせて戴いた爽やかな秋の1日でした。中村貞夫先生の御高作集、画集を御恵贈賜りましたこと誠に嬉しく、幸に存じました。早速、憑かれた様に一作ごと丹念に拝見し、感銘を深めております。画家の眼は心の眼にございます。

小林徹氏が評された通り、ナイルシリーズに接した時、対象に向けられた確かな、鋭い視線はもとより、自然に対する含差に満ちた深い認識の心を覚えました。フォーラムにおける中村先生のご講演胸に響きました。もっと時間が欲しい、もっと承りたいとの思いは出席者全員に通じるものであったと存じます。今回のフォーラムも素晴らしい御企画であり、感動の場であったことを改めて御礼申し上げます。三軒 齋（姫路市）

秋日和の休日ゆっくりとお宅を拝見、また中村氏の幼少よりのお話を聞かせて頂きました。文化財としての畑田家を存じ上げておりましたが、なかなか訪れる機会もなく、今回やっと拝見できました。文化財とはいえプライベートな面まで垣間見られ御苦労はいかばかりかとお察し致します。私も奈良御所の出身の事と旧家元庄屋といった家々を拝見してまいりました。地方によって家の間取りや佇まいに一寸した差異のあるのが大変興味深く、今回は是非主人と一緒にお邪魔したく思います。

牧浦尚子（羽曳野市）

中村貞夫さん、高三の時に新制作に入選。絵は、小学生の時先生に褒められたことがきっかけ、幸運だったのは、中学校のとき小磯良平さんの弟さんが、数学の先生でおられてその縁で、小磯さんのアトリエに出入りをゆるされたこと。小磯さんのアドバイスで芸大には進まず、阪大の仏文を出て、画家に。主に水と光の風景画を（ローアンバーやイエローオーカー、ホワイト等）限られた色彩で描いてこられたようです。

60歳になられて、20年かけて四大文明を育んだ大河を描くことを思い立たれます（なんと壮大な計画）。1994年から1年かけてナイルの源流から河口まで、現地へスケッチに。それが畑田邸の広い納屋で大作に。そして夢はチグリス・ユーフラテス、インダス、黄河へと続く。大河の流れのように悠然と、しかも絶え間なく、中村さんは自分の目と感性で描き続けてゆかれることでしょうか。どうぞお元気で、雄大な夢の完成を！

浅田八重（羽曳野市）

羽曳野の文化力

大阪大学総合学術博物館教授 肥塚 隆

国の登録有形文化財に指定されている羽曳野市の畑田家住宅のご当主の畑田耕一先生から、畑田家住宅活用保存会の秋の一般公開の際にフォーラムを開くから文化交流について話をしたいとのご依頼をうけたので、タリバーンが破壊したパーミヤーンの大仏などが4半世紀前に撮影したアフガニスタンのスライドをお見せするのでよければと申して、お引き受けしました。しかし正直なところ、そんなに人も集まらないだろうし、話のあとの質疑も盛り上がりたらないだろうと、高を括っていました。

ところが昨年秋も深まった11月17日、羽曳野に寄せて頂いて、長い塀に囲まれた畑田家のたたずまいと、立派な長屋門にまず圧倒されました。そして驚いたことに、居間と仏間の14畳に数十人の方々が集まっておられ、入りきれない人たちは表玄関や廊下にも坐っておられました。アフガニスタンの代表的な遺跡や美術品のスライドをお見せするとともに、紀元前の昔から各地の文明が伝えられたアフガニスタンは、同時に列強の侵略に絶えずさらされ、戦乱に明け暮れたことをお話しました。私の話は、1年後に畑田家住宅活用保存会から多数の写真とともに出版されましたので、そちらをご覧ください。

スライド終了後は、畑田先生の司会で討論が始まりました。ヨーロッパやアメリカの文化についての発言や、日本人の文化観についての指摘もありました。また、畑田家の納屋をアトリエとしておられる画家の中村貞夫さんは、取材で滞在されたエジプトのイスラーム教徒の話をしてくださいました。皆さんの発言は、いずれもそれぞれのご体験に基づくものであり、しかもきわめて幅広い内容でした。

2000年春に始まった保存会の活動は、住宅の一般公開と社会人向けのフォーラムのほかに、さまざまな催しをしておられます。高名な研究者が小学生や中学生に授業する畑田塾は、すでに4回開かれています。また、オルゴールを聞く会や、ギターやハープの演奏会も開いておられます。あるいは、日本に来ている留学生と外国に留学していた日本人とによるフォーラムもあったそうです。

最近、文化庁は「関西から文化力を」という運動を展開していますが、畑田家住宅活用保存会の活動は地域に根ざしたきわめて着実なものであり、このような小さい活動の積み重ねこそ、真の文化力を育て、やがて大輪の花を咲かせるに違いありません。

会計報告

員

収入の部

繰越金	213,841円 (前年度繰越金)
会費	536,000円 (268口)
寄付金	159,500円 (7口)
雑収入	48,500円 (絵葉書、他)
合計	957,841円

畑田 勇
甲斐 学
中村 貞夫
畑田 拓男
幹事 笠井 敏光
久米 智子
会計 畑田 庸雄
監査 澤田 秀雄
塚本 昭光
顧問 畑田 耕一

支出の部

借料、損料	10,000円 (机、椅子等)
講師謝礼	310,000円 (6名)
アルバイト料	10,000円 (ビデオ撮影、他)
資料作成・印刷費	271,700円 (資料、年報、出版)
通信費	44,020円 (振替手数料、郵送料)
事務費	109,312円 (事務用品、バッジ、他)
雑費	45,964円 (講師接待、他)
繰越金	156,845円 (次年度繰越、一部積立)
合計	957,841円

編集後記

大阪も急に冷え込みが厳しくなり、この寒波がしばらく続きそうです。年報No.3をお届けします。皆様のご熱心なご支援のおかげで活動を続けさせていただいています。年報を編集していて、皆様の文章をまとめた形で読ませていただいて、強い熱意を肌で感じています。私共の活動も地味ながら他のどこにもないスタイルが出来つつあると自負しています。今後共どうぞよろしくお願い申し上げます。

畑田家住宅の近くの南阪奈道路の建設が進んで、新しい景観が生まれています。完成後はあたりの様子がどのように変わっていくのでしょうか。

この度、日本建築協会の第3回読者と選ぶ「建築と社会賞」の中の論考部門賞を当主の畑田耕一氏が「登録有形文化財の動態保存」で受賞されました。その要約は年報No.2に掲載されています。(S.N)

(表紙カット「大黒柱と梁」 中村貞夫)

事務局 〒583-0874 大阪府羽曳野市郡戸1-1 畑田 勇 TEL 0729-55-4380

会費の納入は郵便振替(口座番号 00980-2-41107; 加入者名: 畑田家住宅活用保存会)へ